
文化的多様性から見る現代中国の民族関係

郝 時遠

<中国社会科学院民族学・人類学研究所>

要 旨

本文は、人類の普遍性と文化の多様性という観点から、文化の多様性の中に人類の普遍性を追求することを目的としている。これは観念上の大変革である。中国は世界最大の発展途上国であり、現在の発展のレベルとバランスは依然として初級段階にある。中国少数民族の人口総数は既に一億を超えており、その大部分は経済地理的意味においての西部地区に集居している。また、西部地区は、中国において生態の多様性と文化の多様性が最も顕著な地域でもある。この「二つの資源」を保護することは、既に西部大開発の基本理念となっている。中国の各民族の関係は、民族間の交流がますます広範且つ密接なものとなる段階に入っている。これは、中国民族関係が発展する中での基本的な趨勢であり、また中華民族が経済文化及び社会生活の面で統合される段階に入ったことを意味している。

キーワード 文化的多様性、西部大開発、「二つの資源」、都市化、民族関係、文化保護

文化的多様性とは現代人類社会において形成された新たな文明観であり、人々が生物の多様性について目の当たりにした危機感や、その人類社会におよぼす危険性に伴って現れた新たな理念である。自然界について言えば、生物的多様性とそれによって保たれる生物連鎖の完全性によって生態バランスは保たれている。これについて人類は既にかなり成熟した認識をもっており、またその保護、回復については再構築をグローバルな活動の基礎においている。では、人類社会にとって世界平和の基礎とは何であろうか。これは古来より人類が一貫して探し求めている謎であり、未だに解決されていない重大な問題である。

一、人類の統一性と多様性

人類は統一されたものであり、文化は多様なものである。人類の統一性を肯定することは人類の多様性を否定することにはならず、その逆もまた同様である。人類の生物学的共通性および多くのもって生まれた生理的共通性に対する肯定は、人類進化のプロセスから導きだされたものであり、人類の多様性に対する肯定は文化創造のプロセスから見出されたものである。このような考えは、西側の伝統的な人類起源“多元論”および文化“一元論”と相対立する概念である。

人類社会の進化の歴史から「真の創造性は均一性へと帰結しない」ということを見出すのは、決して難しいことではない[拉茲洛 1997:121]。各民族間の文化的差異は各民族が異なる環境において自然や自らを認識することによって創造されたものである。正にインドの大詩人タゴールが言うように、「世界各民族の遭遇する困難は互いに異なり、困難を克服する方法もまた異

なる」のである[泰戈爾 1986: 1]。例えば河川湖沼地帯や海辺の舟運の発達、大砂漠・大草原での遊牧、山岳森林地帯での焼畑耕作、氷雪地帯での漁労・狩猟などのように、各民族が異なる生存環境の中で直面した困難を解決する方法は、人と自然の相互作用によって生じた結果である。これらの伝統的な生活様式に見られる発展形式の違いは、これらの生活様式の創造者が直面した、自然地理条件の違いによって創出された独自の選択に直接起因している。選択の結果が文化的多様性なのである。

生態人類学(Ecological Anthropology)の観点から言えば、自然環境と人類文化の相互関係は非常に密接なものであり、このような相互関係に対する学術界の認識には様々な立場¹があるが、生物的多様性をもった地域に文化的多様性が現れることは普遍的法則である。異なる生態環境においては、人々の生活手段の起源やその種類は同一ではなく、これによって生じる環境に対する需要、利用方法もまた異なる。これらの自然への認識、自然の利用によって形成される知識、経験、行為、技術および価値観は文化的多様性を構成することとなる。人類文化に対する自然環境の影響は明らかではあるが、この影響によって決定されるのは文化類型の違いであり、文化の優劣を決定するものではない。

これまで自らの文化的多様性に対する人類の認識は、一貫して非文明的状態にある。差異を恐れ、排斥し、消滅させるという意識が人類社会の発展プロセスにおいて主流であり、これによって引き起こされた矛盾、衝突、戦争は人類の歴史に溢れていた。このような意識や観念は、“地理上の大発見”以来世界中で主流となった。例えば、欧米人の“環境決定論”による多様な文化に対する優劣評価、“種族主義”による外見的特徴に対する人種差別、ひいては“ヨーロッパ中心主義”とアメリカ至上主義は現在でも幅を利かせており、人類の統一と文化的多様性の排斥に挑戦し続けている。

生物学が人類の統一性に関して十分な科学的根拠を提供したとしても、「人々は人類の統一性を受け入れながらも、同時にそれに優劣をつけ、異なる種族に分けようとし、民族の権利が承認されても、一部の民族は自分達を優れた民族と自認し、自らに全人類の指導或いは統治といった使命を付与しようとする」のである。このことは、「生物学による人類の統一性の証明は、人類における優等種族と劣等種族の区分を少しも弱めることはできなかった」とさえ言うことができる。このようにして確立された文化観、文明観は、世界中の近代史において、西側文化の衝撃の下に、多くの“土着文化”が消滅に追いやられるという数々の悲劇を引き起こした[莫林&凱恩 1997: 8, 49, 79]。また現在、世界的現代化が進行する中で、西側学術界には「様々な変装をして着飾った社会ダーウィニズムの復興」現象が現れ、「工業化、現代化と西側化には必ず相互関係がある」という法則の証明がいまだに試みられている[華勒斯坦 1997: 93]。さらにはこの“法則”を擁護するため、「文明の衝突論」の創始者は「アメリカの信条と西側文明を捨てることは、他でもなく我々の知っているアメリカ合衆国の終結を意味する。実際には、これは西側文明の終結をも意味している。……アメリカがなければ、西側は世界人口に占める割合において取るに足らない零落した世界となり、ユーラシア大陸の端の狭く、全く重要性のない半島に追いやられることとなる」と聞こえよがしに断言しさえするのである[亨廷頓

¹ 例えば、“環境決定論”、“環境可能論”双方の対立や交代(或いは結合)といった“生態学的立場”。[哈迪斯蒂 2002: 1-15]

1998:354]。このような恐るべき予想図によって西側世界の団結を維持し、アメリカを指導的地位に推戴し、それによってアメリカ“一極世界”という覇権を確立しようとするこの目的は、全ての発展途上国と民族(nation)に“現代化=西側化=アメリカ化”というレールを用意することにある。しかし、「百家斉放、百家争鳴状態であれば文明は繁栄興隆し、自らと意見の異なる者を受け入れられず、これと協力できなければ文明が零落することは歴史が証明している」のである[カワリ-ス福扎&カワリ-ス福扎 1998:344]。人類社会の実際の発展がこの定理を一貫して証明していることも、文化的多様性が日増しに国際社会において認知されるようになった要因である。

統一は、決して単一の種族、民族、文化および社会制度を意味するものではない。生物学的意味での理解を除き、全人類の視野で文化的多様性を捉え、文化的多様性の中に人類の統一性を求めようというのが現代世界における人類の統一性に対する認識であり、これは重大な意識上の変革である。現代化は経済生活における共通基準を生み出し、人々の生活様式を同一化させるが、このプロセスは文化の破壊を経た同質化によるものではなく、文化的多様性の十分な肯定とその発展によって実現されるものである。なぜなら既に人々は、この世界において異なる文化観や価値観を生む基本的背景が等しく理に適っていると認めることが、正しくもありそして非常に重要でもあること、そして、このようにしてこそ各文化間の相互理解と相互尊重が可能となり、これが文化的多様性をもった世界で平和と生存を維持する基本的先決条件であるということ意識し始めているからである。これは全人類的な観念であり、マルクス主義が早期に提起していた観念でもある。

自然界における種の多様性は生態バランスの維持を可能にするが、なぜ人類社会の文化的多様性は必然的に誤解や衝突を招くのであろうか。人類社会の多様性はなぜ世界の平和を維持できないのであろうか。問題は種の多様性と文化的多様性の範疇の違いにあるのではなく、人類の意識にある。実際に“ヨーロッパ中心主義”を変えようという努力は継続されており、文化相対主義、文化多元主義の出現は共にこの意識の変化を反映したものである。しかし、これらの理論にも様々な欠陥は存在しており、文化保守主義や孤立主義、“純潔性”への強調を容易に招き、異なる文化間の交流、融合、吸収といった相互関係を排斥することとなる。文化的多様性という見地から強調される多様性とは、各個が孤立した多様性ではなく、仮に生物の多様性についての理解を引用するならば、文化的多様性が重要視するのは多様性の価値とその相互依存関係であり、このような関係は有機的な人類の統一性を構築すると共に、「統一化と新たな多様化の進行が更に広範なレベルで展開されるのを決して妨げない」のである[莫林&凱恩 1997:53]。

二、西部大開発の進行過程における“二つの資源”の保護

中国は世界最大の発展途上国であり、各民族の共同発展、共同富裕化という現代化の目標実現に努めている。改革開放から20数年来、経済発展の成功は世界の注目を集めている。しかし、広大な領土と膨大な人口を抱えるこの国家について言えば、現在の発展レベルとバランスは依然として初期段階にある。中国少数民族の人口は全国総人口の8.41%を占めるに過ぎないが、その総人口は既に一億を超え、尚且つその大部分は中国内陸の辺境地域、つまりいわゆる経済

地理的視点における西部地域、中国の生態的多様性と文化的多様性が最も突出した地域に集居している。

全体的に見て、西部地域は中国において経済的、文化的発展が相対的に後れた地域であり、貧困人口が最も多い地域でもある。その内少数民族の貧困人口が総貧困人口中に占める割合は、依然として漢民族の占める割合より極度に高くなっている。極端な貧困が広範に存在することは人権の十分且つ効果的な享受を妨げ²、同時に貧困と社会的零落は人権の保護にとって“重大なリスク”をもたらすため、貧困の撲滅は人権実現の基本的前提である[弗萊納 2000:12]。中国の生存権、発展権を強調した人権概念は、人権の本質を深く理解したものである。かつて中国は世界最大の貧困人口を抱える国家の一つであり、1978年における中国の貧困人口は2.5億人であった。20数年来、中国政府は一連の貧困撲滅政策を制定し、少数民族地域特有の高い貧困人口率について多くの特殊な措置を講じ³、また多大な成果を得た。2002年末までに中国農村の貧困人口は2,820万人にまで減少し、貧困を脱した2.2億人の内、少数民族地域の脱貧困人口は3,600万人に達した。この点から、中国の貧困撲滅の努力とその効果は世界的な貧困減少計画に多大な貢献をしただけでなく、少数民族の平等発展、共同富裕化の権利の保障という面でも発展途上国にとって重要な模範的役割を果たしたと言える。

現在、中国の2,800万の貧困人口は依然として主に西部地域に集中しており、中国政府の定めた592の貧困救済重点県の内、341の県(57.6%)が少数民族地域にあり、少数民族の貧困人口は未だに1,000万を超えている。このため、中国政府は2010年までに貧困問題を最終的に解決することを決定し、貧困救済の重点を西部の少数民族地域に定め、これを既に西部大開発および安定してやや余裕のある“小康”社会の全面的建設という発展計画の基本任務とした。中国にとって、貧困を撲滅しほぼ衣食の足りた“温飽”社会への移行という任務は、既に達成に近づいているが、科学的な根拠を伴った発展問題の解決は始まったばかりである。特に西部地域の経済発展が進む中で直面している“二つの資源”保護の問題は最も注目を集めている。いわゆる“二つの資源”とは、生態的多様性と文化的多様性であり、これらもまた持続可能な発展の基礎となるものである。

中国大陸31の省と区の持続可能な発展水準についての指標の分析からは、西部地域、特に少数民族集居地区の全国的な順位に関する基本的状況ははっきりと見て取れる[中国科学院可持續發展戰略研究組 2004:410-425]。

表1からは、少数民族集居地区が人為的な発展水準の面で基本的に後れた状況にあることがはっきりと見て取れる。唯一上位に位置するのは、汚染物排出強度と大気汚染指数を指標とした地域環境水準の順位となっている。但し、大気汚染レベルが低いことは必ずしも生態環境状況が良好なことを意味するわけではなく、工業廃棄物・廃ガス・廃水の排出レベルが低いという現状を示しているに過ぎない。実際に、生態環境脆弱指数、気候変異指数、土壌浸食指数から構成される上記の地域生態水準からは、少数民族集居地区の順位が依然として最低レベルにあることが分る。環境管理および生態保護指数から構成される地域環境抵抗水準の順位は、これ

² 「ウィーン宣言と行動計画」 世界人権大会 1993年6月25日、ウィーン。

³ 例えば、1994-2000年の間、国家貧困救済資金の38.4%(432.53億元)が5つの自治区および貴州、雲南、青海の少数民族人口の比較的多い3省に投入された。

らの地域の生態環境における脆弱性をよく反映している。

表1 西部少数民族地域の持続可能な発展能力

地域経済発展水準の順位	チベット(31)、貴州(30)、内モンゴル(29)、新疆(28)、雲南(27)、 広西(26)、海南(25)、甘肅(23)、青海(21)、四川(20)、寧夏(18)
地域社会発展水準の順位	チベット(31)、青海(30)、貴州(29)、雲南(28)、海南(27)、甘肅 (26)、寧夏(24)、広西(21)、四川(18)、内モンゴル(10)
地域教育水準の順位	チベット(31)、青海(30)、貴州(29)、海南(28)、四川(27)、広西 (24)、雲南(22)、甘肅(21)、寧夏(20)、内モンゴル(14)、新疆(8)
地域科学技術水準の順位	チベット(31)、貴州(30)、青海(29)、内モンゴル(27)、新疆(26)、 海南(25)、広西(24)、寧夏(23)、雲南(21)、四川(17)、甘肅(15)
地域管理水準の順位	青海(31)、貴州(30)、海南(28)、内モンゴル(27)、新疆(26)、四 川(25)、甘肅(24)、雲南(22)、チベット(18)、寧夏(17)、広西(16)
地域生態水準の順位	寧夏(31)、甘肅(30)、新疆(29)、青海(28)、内モンゴル(26)、四 川(21)、チベット(20)、雲南(18)、貴州(12)、広西(10)、海南(4)
地域環境水準の順位	チベット(1)、海南(2)、青海(3)、新疆(4)、甘肅(5)、雲南(6)、 内モンゴル(9)、四川(11)、広西(19)、貴州(22)、寧夏(24)
地域環境抵抗水準の順位	チベット(31)、貴州(30)、四川(24)、寧夏(22)、雲南(21)、甘肅 (20)、新疆(19)、青海(17)、広西(15)、海南(9)、内モンゴル(4)

中国西部地域は生物の多様性という資源が最も豊かな地域であるだけでなく、文化的多様性という資源が最も豊かな地域でもある。これらの言語文字、宗教信仰、文学芸術、民間叙事詩、飲食、服飾、医薬、建築、生産技術など社会生活の各方面に反映される各少数民族の文化的資源は、豊かな伝統的智恵と生活経験を内に含んでいる。これらの文化を保護、利用および伝承することは、中国民族政策の命題であり、西部大開発における重要な任務である。この点に関して、国家および地方政府、科学研究機関は多くの措置を講じ、多大な成果を上げた。しかし、文化的多様性の保護という任務は依然として極めて困難であり、特に市場経済が不健全な状況下にあっては、地方各レベルの政府による経済発展目標の追求と民間の貧困脱出への切実な願いは、往々にして目先の功利を求め、将来を考えない“発展”を招く傾向がある。

発展は変化を意味するが、変化は発展と同義ではない。発展の意義は進歩にあり、変化には後退の意味も含まれる。20 数年来にわたり中国の発展が進む中で、中国西部地域の生態環境には重大な問題が生じた。2001 年末の国家環境保護総局による西部地域の生態環境に関する現状調査によれば、主要な問題には表土流失、草原と耕地の砂漠化、森林の環境調節機能の減退、河川断流、湖の縮小、様々な自然災害の激化などがある。これらの問題の主な原因の一つは非合理的な経済活動にあり⁴、それはつまり、草原開墾、過剰放牧、森林乱伐、湿地干拓など放任

⁴ 「環境保護総局の報告は警告——西部地域の生態環境情勢は極めて緊迫している」 新華通信ネット 2001 年 12 月 30 日

型経済の招いた破壊的な資源開発を指している。生態環境の悪化は持続可能な発展の基礎とその能力を破壊するだけでなく、文化的多様性の保護にとっても直接的な脅威となる。例えば、大興安嶺地域でトナカイ遊牧に従事するエヴェンキ族は、森林の過度の開発によってトナカイ遊牧の衰退や生態移民となることを余儀なくされ、その伝統文化もまた分断され、周囲に吸収されるという状態に置かれることとなった。

近年来、中国の生物的多様性と文化的多様性に関する観念はますます強まり、生態プロジェクトや文化プロジェクトは国家的行為として絶えず推進されている。国家が西部大開発計画を進める中で、生態保護・建設プロジェクトは、既に西部地域の経済発展および社会発展のための根本的任務となっている。この点において国家と地方政府は多くの措置を講じ、西部地域の貧困問題を重点的に解決すると同時に、経済活動と経済構造の調整を行い、自然保護区の設立を通じて生態環境の自然回復、人工建設を行い、自然林、草地、湿地に対する厳重な保護を行っている⁵。このため、中国は先進国の経験を広く取り入れるだけでなく、広範な国際協力も絶えず求めている。中でも既に開始された“EU-中国生物の多様性保護プロジェクト”の準備活動は、中国西部地域の生態保護および再構築プロジェクトに基づいて計画されたものである。

これと同時に、民族民間文化の保護についても立法段階に入っており、地域経済発展指標における文化に関する項目は明らかに増加している。西部大開発計画は既に単なる経済活動にとどまらず、人と自然、人と社会の調和と共生を構築する持続可能な発展メカニズムとなり、これは中国政府の提起する科学的発展観の基本方針となっている。このため、インフラ建設の推進を主とした経済開発が実行される中で、西部地域、特に少数民族自治地方の生物の多様性と文化的多様性の保護は、既に西部大開発の基本理念となっている。

現代における経済発展の保持、生態バランスの維持、伝統文化の保護は三位一体のグローバルな問題である。ポスト工業社会にある全ての国家は、この問題を如何に科学的に解決するかという問題に直面している。前資本主義段階においては、経済生活は市場と技術の進歩が欠如することによって自給自足的状態に置かれ、人と自然界との相互関係は有限のものとなる。このため、「焼畑農業に従事するセマン人が引き起こす環境汚染作用は性質上——概念上においても——現在先端技術を用いて50億人が引き起こしている汚染作用とは異なる。無論、セマン人は自らが河川或いは森林に対しておよぼしている影響について省みることはしないであろう。このような“自己満足”は近代以前においては理解されるものであるが、河川ひいては海洋を工業用下水道や廃棄物処理場としてしまう世界においては、このような“自己満足”を選択する可能性は失われつつある⁶のである。残念なことに、このような選択の可能性が失われたのは、このような選択を可能とする合理的な継承の基盤が失われた或いは欠如したためであり、人類文明が進化する中で我々が過去を惜しみなく否定するためである。人々は素晴らしい古代遺跡に対してよりいっそうの興味を注ぎ、それを解析しようとしているが、同じように文明の要素を代表する身近な文化現象が消滅しつつあることについては、かえって無関心であり、そ

⁵ 中国は2010年までに1800ヶ所の自然保護区を設立することを目標としており、その総面積は国土面積の約16%となり、重点保護野生動植物の90%と典型的類型の生態システムが効果的に保護される。

⁶ スタタ夫里阿諾斯(スタブリアノス)著 呉象嬰等訳 『遠古以来の人類生命線』 P38 中国社会科学出版社 1992年版

れを軽視してそのまま放置しさえしている。実際には、原始的な焼畑農業であろうと遊牧であろうと、その内部には人と自然の交流プロセスのなかで見出された相互依存、相互バランスといった伝統的知恵が含まれており、これらの知識を発掘、伝承および科学的に抽出し、現代における持続可能な発展にとっての民間的知識の源泉とすることは、文化的多様性保護の重要な活動の一つである。

少数民族の文化的多様性保護という点で、中国各レベルの政府、学术界および民間団体は既に優れて効果のある一連の活動を展開している。著名な口承文学(叙事詩)の収集、採録、整理、出版⁷の他に、少数民族古文献の収集、整理および出版、少数民族伝統スポーツのルールの発展などは全て顕著な成果を上げている。その他にも例えば住居、服飾、器具、飲食、祭日、医学、葬儀、伝統工芸、古跡など社会生活において現れる文化的要素も博物館、観光業、社会化、国際交流などといった方法を通じて益々広範な普及を見せている。2000年、雲南省は全国に先駆けて、当地民族の文化的多様性の保護、発掘、利用によって経済発展を促すことを目的とした民族文化再考発展計画の設立を提起した。現在、このような文化的資源の保護、利用によって経済発展を促そうという考えは、西部地域において広く影響を及ぼしているだけでなく、東南沿海地域および内地のいくつかの省でも“文化大省”或いは“文化強省”といった文化再考計画が次々と制定されている⁸。2004年3月、「少数民族無形文化遺産保護プロジェクト・民間歌謡保護活動」が発表されたのを受けてトン族、ヤオ族、チュアン族、トゥー族、サラール族、ユーク族、ボウナン族、トンシャン族、チベット族、回族の10民族235名の民間歌手によって録音された385曲の民間歌謡が発表された。これは文化的多様性保護活動の新たな進展が反映された一例である。

中国が西部大開発および全面的な小康社会建設を推進するという発展計画を進める中で、“二つの資源”の保護と利用は既にコンセンサスを形成しただけでなく、実際の行動も伴ったものとなっている。学术界もこの方面に関しては大きな影響力を発揮しており、特に中国の文化的多様性の歴史的背景と現況の提示については多くの活動が行われ、文化保護、文化の産業化、民族文化の相互関係に関しても優れた研究を展開している。しかし、このような科学的発展観の実現という意味での現代化のプロセスは依然として多くの挑戦を受けている。西部地域における生態環境の悪化という状況は今尚抑制されておらず、民族文化の流失という現象は依然として続いており、経済発展の加速という切迫した要求と“二つの資源”の保護との関係には未だに多くの矛盾が存在している。これらのような要素もまた現代中国の民族関係における特徴を形成している。

三、文化的多様性の交流の中での民族関係

現段階において、中国社会の基本的矛盾は各民族人民の日増しに高まる経済的・文化的需要と後れた生産力の間のものである。この基本的な矛盾は中国民族問題の主題をも決定付けている。

⁷ チベット族の『ゲサル王伝』、モンゴル族の『ギャングル』、クルグズ族の『マナス』といった著名な民族叙事詩およびウイグル族の大規模な伝統音楽である経典組曲『十二ムカム』などの高級無形文化遺産は全て効果的な保護を受けている。

⁸ 例えば広東、浙江、山東、山西、河南、甘肅、江蘇、河北、黒龍江、深圳などの省や市の文化建設計画がある。

すなわち、少数民族および少数民族地域から出される経済的・文化的発展の加速という切迫した要求と、その自らの発展能力が不足していることとの矛盾である。この点については上記の地域経済・社会発展水準および教育、科学技術、管理水準の順位から容易に理解できる。このため、現代中国の民族問題を考察する際にはこの基本的矛盾から出発しなければならない。

改革開放以来 20 数年間、東部地域の社会経済発展は現代化実施の重点であった。この重要な意味をもった地域経済発展計画における方針は、中国が貧困と立ち後れから脱却するために必須のものであり、一部地域が先に発展し、一部の人間が先に豊かになるという発展プロセスが国家全体の迅速な発展をもたらすということは、既に事実によって証明されている。このプロセスにおいては、西部地域、特に少数民族集居地区の発展も見られたが、そのスピードはやや緩慢なものとならざるを得ず、このことによって東西両地域間の発展格差は更に拡大することとなった。1990 年代半ば以前、東西間の経済格差が持続的に拡大したことは、国内民族関係の健全な発展に最も大きな影響をおよぼした要素であったと言える。特に少数民族自治地方では、一方で計画経済の下にこれらの地域の受けていた優遇政策が市場経済の推進に伴って、継続困難或いは利益低下といった事態を招き、もう一方で人材、資金、インフラストラクチャーおよび経営管理水準の著しい不足といった条件の制約によって、市場経済に適応した競争力の欠如が見られた。東西間の発展格差を比較することによって生じる反応やそれによって生まれるネガティブな態度や不満は、民族政策のレベルにおいても民族区域自治制度の優位性に対する疑念を生じさせている。

中国東部地域を先行発展させた目的は全国共同発展を実現させるためであり、これは中国現代化事業の基本目標でもある。東部地域の発展およびその国家全体の発展能力を強化するという巨大な作用に伴って、国家の西部地域に対する投資と援助はますます増加し、世紀の境目に西部大開発計画が開始されることとなった。中国の西部大開発は各民族の共同発展、共同富裕化の実現という重要な戦略的ステップであり、平等、団結、互助からなる民族関係は、堅実な物質的基礎を打ち立てるために必ず通らなければならない道であり、全面的な小康社会建設のための命題でもある。共同の経済的基盤が無ければ各民族の十分な平等、団結および互助を実現することは不可能である。この意味において、現代中国の民族関係は共同発展、共同富裕化という目標を通じて、真実且つ十分な平等、団結および互助関係を実現しようとしている。各民族一律平等の実現は中国民族政策の基本目標であり、この平等は政治的地位にのみ限定されるものではなく、経済や文化および社会生活の各分野にも適用される。団結とは平等を実現するための保証であり、平等の実現レベルを示すものでもある。互助とは団結維持のための必要条件であり、各民族の利益統合を実現するための保証でもある。現段階の地域間の経済関係については、東部地域および発展した省や市と西部地域の間には、安定的且つ発展的な互助協力関係が既に形成されたと言える⁹。発展した地域の資金、技術、人材と発展していない地域の資源、市場、製品を結合することによって、全国的な統一市場の形成が推進され、また西部地域の経済・社会的発展が加速されており、めざましい成果をあげている。

⁹ このような互助関係の典型的なモデルとして、東部地域の比較的発展した省や市が西部地域を援助するという形式が上げられる。例えば北京—内モンゴル、天津—甘肅、上海—雲南、広東—広西、浙江—四川、山東—新疆、遼寧—青海、福建—寧夏、大連、青島、深圳、寧波—貴州、全国—チベットなどがある。

西部地域の発展はまさに長期的なプロセスであり、東西地域の間には長期的に相当大きな格差が存在することになるであろう。例えば、工業化、情報化、都市化および科学技術革新能力によって構成される全面的な小康社会実現のための地域発展原動力の順位において、その全国平均水準は 47.15%、東部地域は 63.30%、西部地域は 29.67%となっており、その内上海、北京がそれぞれ 93.86%と 91.62%に達しているのに対して、少数民族の集居する省や区は基本的に 35%以下という状況に置かれており、チベットの 18.31%、貴州の 21.34%が最低水準となっている[中国科学院可持続発展戦略研究組 2004:339]。ここからは、西部地域、特に少数民族集居地区の内部発展原動力が全国平均水準に達することは、短期的には決して実現されないであろうことが容易に見て取れる。このため、中国は世界的に見れば民族問題の解決に著しい成果をあげた多民族国家に属するが、既に解決された問題および解決しつつある問題は、全て現段階において直面している最も基本的な問題であり、それらはつまり中国各民族人民の生存権と発展権の問題であると言える。

民族問題の解決に関して、旧ソ連はかつて“一度の苦勞によってその後の安定を図る”という方法によって民族問題は解決されたとする見通しを表明したが、1990 年代初頭にソビエト連邦は民族分裂によって解体した。種族問題を含む民族問題は長期的に存在するという特徴をもっており、世界中のどの多民族国家にしても民族問題を完全に解決したと言うことはできないであろう。国家によって位置する社会発展段階は異なり、内部に抱えた民族問題を含む社会問題もまた国家によって異なる。中国は現段階における民族問題の解決において、経済・文化の発展の加速という主題を強調しているが、このことは現代化の目標を実現した後に民族問題が存在しなくなることを意味するものではない。実際に、中国現代化が進む中で起こった民族問題は、一方で中国社会全体における発展の後れと各民族間の発展格差が顕著であるという特徴を示しており、もう一方では現代化の進行と共に各民族間の関係が次第に密接となったことを示している。このことから、特にグローバル化の影響によって出現したポストモダンの要素を含む幾つかの新しい問題が生じており、これらの問題は全て、現代中国の民族関係に影響をおよぼす新たな特徴と新たな要素を構成している。

第一に、改革開放から 20 数年来、経済・社会の発展が民族関係におよぼした最も顕著な影響は民族間の交流であった。市場化、都市化、農業経営体制の改革と発展は、かつてないほどに人口の流動を推し進めている。この現象は計画経済時代の厳しい戸籍制度の下では想像もできなかったものである。主に農村から都市へと流れる億にも上る人口の内、少数民族流動人口の割合は増加し続けており、その主要な流出先は東南沿海地域および発展した都市となっている。少数民族の全国的な分布状況には明らかな変化が生じており、例えば 1990 年の全国人口センサス時には、唯一北京だけが 56 の民族が居住する地区であったが、2000 年の全国人口センサスでは、56 の民族が居住する省や区は全国で 11 に達し、55 の民族が居住する省や区は 17 にのぼることが明らかになった[周方 2003]。一部の発展した都市における少数民族流動人口数は、当地に戸籍をもつ少数民族人口を大幅に超え、2002 年の広州市では少数民族流動人口が 19 万となり、当市に戸籍をもつ少数民族人口の 4 倍となった。このような現象は北京、上海、深圳、天津、南京などの大都市においても極めて普遍的である。またこれとは逆に、漢民族の流動人口が少数民族地域へと流れ込むことという現象も同様に普遍的である。中国各民族の関係は、

既に民族間の交流がますます広範で密接なものとなる時期に入っている。

第二に、ますます広範なものとなる民族間の交流関係は、各民族間の経済、文化および社会生活の交流をもたらしている。流動人口は郷土を離れたとはいえ、依然民族文化と民族習俗の継承者である。かれらは都市生活と漢民族の文化環境に適応すると同時に、地方・民族の文化的特徴を持ち込み続けた。ここ数年来、少数民族地域の民族的特色を備えた一部の製品が絶えず全国的市場で流通していることの他に、飲食業に代表される少数民族的特色は既に大挙して各都市に流入し、都市生活における独特な消費ブランドとなっている。この他に、少数民族の芸術、服飾、医薬、建築などの文化様式は都市生活においても重要な役割を担うようになって来ている。またこれに加えて、テレビ、メディアおよびインターネットが少数民族文化の宣伝作用を果たし、文化的多様性は中国都市生活における最も重要な趨勢となっている。今日では、中国の如何なる都市においても多民族の交流という特徴を感じることができるが、この現象は中国における文化的多様性の大規模な融合と交流という流れの始まりに過ぎない。

第三に、既に述べたように、中国の現代化達成についての見通しは、13億の人口を抱えるという基本的な国情に立脚しなければならない。中国における都市化の進行は始まったばかりであり、2000年までの全国の都市数は僅かに663都市であり、都市化水準も36.09%にとどまっております、一部の先進国の平均85%という水準には程遠い¹⁰。2050年に中級発展国家となるという中国の目標によれば、都市化水準は75%にまで高めなければならない、これは毎年1,000から1,200万の農村人口が都市に移転することを意味している。このため、現在の人口流動と民族間交流はこの発展プロセスにおける初期段階に過ぎないと言える。しかし、この留まることを知らない現象は、中国各民族のますます密接になる相互関係と文化的多様性が、都市生活の中でどのように反映されるかを示しており、また一方で民族関係における新たな問題をも提起している。例えば、少数民族流動人口が都市に入って以降直面する就業、言語、子供の教育、宗教活動、飲食習慣、葬儀習俗などの一連の問題とそこから生じる価値観や行動様式などの文化的適応問題は、都市管理、都市生活、民族関係といった面で多くの新たな問題を提起している。

中でも、最も突出した問題は少数民族流動人口を如何に受け入れ、その權益を如何に効果的に保障するかという問題である。1990年代、民間レベルにおける多くの民族問題は例外なく都市生活の中に反映されたが、このことも都市少数民族權益保障政策および保障法規が普遍的に制定された要因である。1993年に中国國務院が「都市民族工作条例」を批准して以来、大部分の省や市はこれに関連する条例を制定した。それらは例えば、「上海少数民族權益保障条例」(2002)、「北京市少数民族權益保障条例」(1998)、「浙江省少数民族權益保障条例」(2002)、「吉林省散居少数民族權益保障条例」(2002)などである¹¹。これと同時に、国家レベルにおいても「散居少数民族權益保障条例」、「少数民族風俗習慣保障条例」などが制定されようとしている。これらの条例は、中国各民族が更に広範に渡って散居状態を呈するようになったことを反映して制定されたものであり、中国の各民族が更に普遍的、基層的レベルで都市化、社会化され生

¹⁰ 中国科学院可持續發展戰略研究組によれば、2000年の先進国の都市化率は、アメリカ94.7%、イギリス89.1%、フランス82.5%、ドイツ81.2%、日本77.9%となっている。

¹¹ 更には湖北、湖南、雲南、広東、広西、遼寧、貴州、黒龍江、山東、江蘇など省や、武漢、ハルビンなど一部の都市でも相応の条例が制定された。

活するようになったことをも示している。

第四に、現代化、都市化および市場化の進行によって推進される民族間の交流という情勢は、次第に民族集居という状況を変化させるだけでなく、少数民族集居地区に対しても顕著な影響をおよぼすようになってきている。無論、このような影響は二重の意味をもち、一方では少数民族流動人口の外地での就学、就業、商売、出稼ぎといった観念の変化やそれによる経済的利益として表面化し、彼らの本籍地の家族、親族、同郷人、村ひいては地域全体に対して模範的行動としての影響を生み出し、更に多くの人を送り出すことが促進され、郷土の発展にとって積極的影響が生じている。これと同時に、現代化された経済生活と文化生活もまたテレビ、流行音楽、ファッション、観光業などといった大衆消費文化形式を伴って次第に農村、牧業区および山村へと深く入り込むようになった。もう一方では、生活困難な経済状況を変えようという切迫した願望と優勢な文化の影響は、民族自身の発展にとってネガティブな影響を生じさせている。これは主に伝統文化の流失や伝統的生活の変化といった面に表れている。

一般的に、伝統的な農業社会において、ある民族の言語、文化、習俗は比較的閉鎖的な社会生活環境によって保持され継承される。しかし、現代工業社会においては、市場経済に後押しされた地域間、民族間の交流と相互関係は絶えず強化され続け、大部分の伝統的要素はこのような相互関係の中で変異し、時には流失しさえする。これについて中国において特に顕著な問題は以下の数点である。

1. 少数民族言語資源の流失の激化

言語学会の調査と統計によれば、中国で現在使用されている少数民族言語は120種以上ある。しかし各言語の使用人口は極めてアンバランスであり、使用人口が5万人以上の言語は僅かに35種、使用人口が1万人以上の言語でさえ51種のみである。これはつまり、約70種の言語の使用者が1万人以下であることを示しており、ある言語では実際に使用されているのはある村のみに限定されていたり、時には数人の老人に限られていたりさえする。このような状況は世界6,000種以上の言語の使用状況と基本的に一致している。言語活力(language vitality)の計測基準によれば、行政、立法、司法、教育、出版、メディア、文芸、宗教、経済、情報分野における活力を備えていない言語は危機言語(endangered language)に属するという[黄行2000:10]。例えばホジェン語、満語、ショオ語、タタール語など10数種の少数民族言語は、共に使用者が1,000人以下という危機的状況にある。中でも、2000年の調査統計によれば、程度は異なるもののホジェン語を話せるのは僅か19名の60歳以上の老人のみであるという[徐世璇2001:86]。また、大多数の少数民族言語は文字をもたないため、多くの言語活力計測基準における活力を備えておらず、そのため言語資源の流失が依然として続いているだけでなく、その速度は増加の傾向にある。言語は民族にとって最も重要な特徴であり、少数民族言語資源の流失は民族の特徴の弱体化という意味だけでなく、それに伴う言語が担い、表現する民族の文化的要素の流失をも意味している。

2. 観光業と文化産業の隆盛によって生じるマイナスの影響

西部少数民族地域における生物の多様性と文化的多様性という資源条件は、観光業と文化産

業の発展にとって有利なものである。国民経済の成長、人民の生活水準の向上および西部地域の交通、情報インフラの改善に伴って、少数民族地域の観光業と文化産業は大幅な発展を遂げ、著しい経済・社会的効果と利益を上げた。しかし、観光業の隆盛は少数民族地域の経済発展を促し、より多くの就業機会を創出し、少数民族地域の文化的多様性を拡大させたが、一方では観光市場における計画と管理が依然として不完全であるため、人為的な観光施設の建設による自然景観の破壊、サービス業者と観光客による環境汚染、奇をてらった文化プロジェクトの考案など、少数民族地域の持続可能な発展と“二つの資源”保護にとってマイナスの影響ももたらされた。ひいては、雲南省滬沽湖地域に居住するモソ人の“走婚”という伝統的通い婚が観光客の“体験”アトラクションとされたことに代表されるように、一部の少数民族の伝統的民俗習慣さえもが観光プロジェクトとして取り上げられたり、現地に風俗業が出現したりといった事態にまで発展している。このような歪曲した発展現象は普遍的なものではないが、民族関係と少数民族の伝統文化保護にとってネガティブな影響を生じさせている。

3. 民族相互交流の中での文化適応と摩擦

中国の民族関係は前例のない民族間交流段階へと突入しており、民間レベルでは各民族の文化適応問題が際立って表面化している。特に少数民族自身の経済・文化的発展に伴い、少数民族は次第に後進性から脱却すると同時に、自らの民族的自尊心や誇りをますます強めており、これに呼応するようにして外部環境に対してより敏感になってきている。都市生活や漢民族集団と少数民族の文化習俗や宗教信仰などといった特徴とが接触する機会がますます増える中で、メディアの報道、文学作品、映画やテレビ、日常の接触においても、好奇の目、先入観、曲解が存在し、時には侮辱的なものが現れることさえある。そのためこれによって引き起こされる少数民族の集団的、地域的反応も明らかに増加している。

4. 文化的アイデンティティの地域的およびエスニシティ的(ethnicity)側面

文化的多様性は、経済発展に有利な条件として中国の各民族、各地域の共通認識となっている。漢民族の地方文化の発掘と発揚、少数民族文化の保護と利用は既に中国の経済・社会発展にとって重要な事項となっている。漢民族集居地区では、地域的な文化資源の開発によって文化的境界線の維持という観念が強化されており、少数民族集居地区では、民族的文化資源の維持によってエスニシティの境界線意識が強化されている。このような傾向は、現代文化の統合性を背景としつつも分離的な特徴を表面化させている。このような文化的アイデンティティの地域的・エスニシティ的特徴は、相互吸収および相互影響は不可避であるという基本的姿勢をもちながらも、一方で地域的・エスニシティ的な文化的特性を維持・創出しようとしている。このことは、グローバリズムの影響下に現代化を進めた中国において出現した矛盾の存在を反映しているとも言える。

総じて言えば、現代中国の民族関係は既に民族の相互関係がますます密接且つ広範なものとなる時期に達しており、民族関係に関わる政治、経済、文化および社会生活の事項は更に具体化と多様化の相を呈している。これは民族関係の発展の基本的情勢であり、中華民族(Chinese nation)が経済・文化および社会生活のレベルで統合される時期に来ていることを示している。

無論、中国においてこのプロセスは始まったばかりであり、市場経済、都市化、人口流動およびそれに伴う婚姻関係などの要素によって、この情勢は長期的且つ持続的に推進されるであろう。しかしこのプロセスにおいて、経済生活や文化適応といった面に現れる問題は、民族問題を含め増加しつづけるであろう。そしてこれは避けられないプロセスでもある。経済、文化および社会生活のレベルにおいて現れる民族問題の増加は、民族の相互関係がますます密接となることによって生じる文化的差異の顕在化の結果であり、この問題の解決は同質化された生活様式によってなされるのではなく、文化的多様性の意識を強化することによって矛盾が解消されなければならない。文化的差異を受け入れる目的は、文化的多様性を尊重するためであり、各文化類型の天賦の独立性を強調するためではない。実際に、中国における数千年の文明発展の歴史においては、いわゆる東夷、南蛮、西戎、北狄と華夏の“五方の民”は、一貫して相互関係にあり、異なる文化の相互影響と吸収のプロセスが絶えることなく続いて来た。各民族の間に存在した“彼の中に我あり、我が中に彼あり”という関係が統一された多民族国家を維持し、形成してきたのである。このような歴史的背景が現代市場経済という条件下において更に発展することによって、相対的な集居状態からますます普遍的なものとなりつつある散居状態への移行が明確化している。このような情勢にあつて、各民族の離散集団(Diaspora group)の増加と文化的多様性の交流は、同化現象、民族間結婚、マイノリティの権利、エスニックアイデンティティ(ethnic identity)、エスニックコミュニティなどといった民族関係の新たな問題を数多く生み出している。このような現象は、民族学、人類学、社会学などの分野における現在の重要研究課題であるだけでなく、国家の民族政策がその発展と整備に取り組んでいる課題でもある。

人類の統一性と文化的多様性という観点から見て、人類社会は様々な面で統合と分離の相を呈しており、実際それは統一性と多様性が入れ替わり顕在化し、またそれが絶えず発展してきたことの表れでもある。“統一”とは、そのある構成部分を統治的地位に置き、その他の部分を従属的地位に置くことを基礎とするが、“統合”とは各構成部分が共存と互惠という秩序の中で協調することを指す。統一は組織された共存関係にあるコミュニティの上に生じるものであるため、多様性を消滅させるものではない。また統合は多様化を補完するものであつて、多様化を否定するものではない[拉茲洛 1997:136]。このため人類は統一されたものでもあり、多様化されたものとしても存在し、多様化を受け入れることによって初めて統一は認識されるのである。ポスト冷戦時代の多極化という情勢は、実際に国際政治のレベルにおいて人類の多様性を示したものである。異なるイデオロギーや異なる社会制度は発展を通じて競争すべきものであり、対立を通じて覇権を争うものではない。今日の人類社会では、帝国主義的覇権の時代は終わろうとしており、平和と発展の歴史が形成されようとしている。平和は公正と平等を表し、発展は進歩と繁栄を約束する。平和が無ければ発展は無く、発展が無ければ進歩も不可能である。そのため、平和維持と発展促進は、既にある国家やある民族が主導できる国際活動では無くなり、全人類の共同参加と共同努力を必要としている。平和維持のためには各国、各民族の相互尊重関係が必要であり、発展促進のためには各国、各民族の相互依存関係が必要である。現代人類社会の発展問題は文化、文明問題と生態問題に直結するため、共同体と国家の関係は、内在的で相互関係によって構成される文化——つまり相互依存の文化——を主体として構築さ

れるようになり、このことは既に非常に重要視されるようになっている[拉茲洛 1997:129]。文化的多様性を受け入れ、それを十分に尊重することは、正にこのような非常に重要な依存関係を源としているのである。

参考文献

- カヴァリ-ス福扎. L. L. カヴァリ-ス福扎. E. (L・L・カヴァッリ・スフォルツァ、E・カヴァッリ・スフォルツァ) 楽俊河訳 杜若甫校正 『人類の大遷徙』科学出版社 1998 年版
拉茲洛. E. (E・ラズロー) 李吟波等訳 『決定命運的選択』三聯書店 1997 年版
弗萊納. T. (T・フライナー) 謝鵬程訳 『人權是什麼?』中国社会科学出版社 2000 年
哈迪斯蒂. 唐納德. L. (ドナルド・L・ハーデスティー) 郭凡、鄒和訳 『生態人類学』文物出版社 2002 年
莫林. 埃德加. 凱恩. 安娜. 布里吉特. (エドガー・モリン、アンナ・ブリジット・カイン) 馬勝利訳 『地球一祖国』三聯書店 1997 年版
亨廷頓. 塞繆爾. (サミュエル・ハンティントン) 周琪等訳 『文明の衝突と世界秩序の再編』新華出版社 1998 年版
斯塔夫里阿諾斯(スタブリアノス) 吳象嬰 等訳 『遠古以来の人類生命線』中国社会科学出版社 1992 年
泰戈爾(タゴール) 譚仁俠訳 『民族主義』商務印書館 1986 年
華勒斯坦 等(ウォーラーステイン等) 劉鋒訳 『開放社会科学』三聯書店 1997 年
北京大学法学院人權研究中心編 2002 『國際人權文獻選編』北京大学出版社
黃行 『中国少数民族語言活力研究』 P10 中央民族大学出版社 2000 年
徐世璇 『瀕危語言研究』 P86 中央民族大学出版社 2001 年
中国科学院可持續發展戰略研究組 『2004 中国可持續發展戰略研究報告』科学出版社 2004 年
周方 「解讀五普的少数民族人口」 『中華民族』2003 年第九期

(邦訳 小嶋祐輔)